

ミミズの災難

中村 龍介

東京の西端を流れる多摩川は源流を埼玉県に発するが、下流域は神奈川県川崎市と東京都大田区の境界線となつている。大田区側の川べりの一角には、大規模高層マンション群が立ち並んでいる地区があるが、その最南端に位置する、薄茶色の、十四階建て三棟からなる「多摩川ハイム」の三号棟、七階にある六戸のうちの二戸が我が家である。

その昔、「死の川」と言われていた多摩川も今ではすっかりキレイになり、東京都産業労働局の資料によると、昨年三月中旬から五月末までの七十日間に四六三万匹のアユの遡上が確認されたという。

アユの他にもたくさん魚が棲息しており、フナやヤマメのような在来種以外にもグッピーやネオンテトラ等の熱帯魚も多数見つかつている。これは、ペット愛好家が鑑賞用に飼育していた熱帯魚を飼いきれなくなつて多摩川に放流するというケースが背景にあるとされる。

小型魚に加えて、アマゾン川で採れるピラニアやアロワナといった猛魚の類も見つかるので「多摩川」と「アマゾン」を文字つて「タマゾン川」との別名も頂戴している。

こうした魚を求めて色々な野鳥たちが多摩川にやってくる。トビ、カラスはもちろんのこと、ヒヨドリ、ムクドリ、ツグミ。更にはカワウやサギなど名うてのフィッシュ・ハンターもやつてくる。

我が家のベランダからのバードウォッチングは、独居老人の楽しみの一つにもなつているが、最近になつて、海鳥だと思つていたカモメがやってくることも多くなつた。

五月上旬のある朝、雨の音に目が覚めてリビングの窓から川を見下ろすと、無数のカモメが河川敷に降りてきている。空中を飛んでいるカモメの群れも居て、東京湾のカモメが集団疎開してきたのかと思つたほどだ。

そういえば、カモメが集団でやつてくるのは雨の日が多い。しかも彼らは川の魚を狙うのではなく、河川敷の草の上で何かを捜しもとめているのだ。

雨の日に出てくる動物でカモメの餌になるものは？

―それはミミズ。

草のたくさん生える河川敷はミミズにとって食料の宝庫なのだ。山では、枯れ葉が腐葉土になるように、河川敷では枯れ草が腐葉土になる。ミミズは腐葉土の中の有機物を食べるから、多摩川の河川敷にも大量のミミズが居るわけだ。では、雨の日にミミズが土の中から出てくるのは何故？

―酸欠になるから？

ネットで調べてみても、雨の日にミミズが土中から出てくるのは土の中に水が溜まってミミズが呼吸できなくなるので地上に出てくる、という説明が多い。だが、待てよ。この説明は分かりやすいのだが、本当か？ ミミズは環形動物なので呼吸器がない。ということは皮膚呼吸だから水の中でも水中の酸素を皮膚から吸収できるはずだ。

というわけで、これにはもつと深いわけがあるようだ。が、詳細な背景は別の機会に譲りたい。要は、雨の日にミミズが土中から出てくることは事実なのだ。

それでは、雨の日にはミミズの犠牲者はどのくらいいるのだろうか。面白半分には計算してみる。次のページの写真をご覧いただきたい。そこに写っているカモメの数をざっと千羽としてみよう（好奇心のある方は正確に数えて下さると有難い）。

彼らが雨の日にやってきて河川敷でミミズ・ハンティングするのは一時間前後だ。その間に一羽当たり最低十匹のミミズを食べるだろう。全体では、一万匹だ。カモメの大群は我が家の前だけにやってくるわけではなからう。

多摩川全体で十カ所に飛来するとして、全体では十万匹。雨の日の度にそれだけの殺戮が実際に行われている。たかがミミズと言うなかれ。彼らは土壌の浄化には欠かせない益虫である。

これから梅雨の季節に入ると当然雨の日が多くなる。ミミズの災難はますます増えていくだろう。食物連鎖の世界だといえはそれまでだが、ミミズの捕食者といえば、モグラ、カエル、ヘビといったところが常識で、ミミズのDNAもカモメを捕食者として認識する構造にはなっていないだろう。

河川敷にカモメの大群が飛来するのを目の当たりにする度に、ミミズへの同情を禁じ得なくなる。

【二〇一七年五月記 原稿用紙五枚 課題「朝」】

「鵜の眼」で水面を見つめる川鵜



何処から飛んできたのか、カモメの大群

